

海獣をこえん

カリブ海の捕鯨事情⑥

A&B

最後に、セントビンセント・グレナディーン(SV G)からバルバドス、トリニダード・トバゴを経由して、なぜカリブ地域内の移動で、こんなに大変なのだと思いつながら、アンティグア・バーブーダ(A&B)を訪れた。3か国の中で、米国にもいちばん近く、キューバにも近い。そのゆえんからか、北朝鮮や中国と外交関係もあり、セントルシア(SL)やSVGが自主にした、台湾からの漁業・農業支援施設

ら、捕鯨船として国際捕鯨委員会(IWC)に参加し、日本と同じスタンスに立ち、投票しているのだ。グアドループやマルティニクというフランス領のカリブ島嶼(じま)も、国出身のCEOが2000年に鯨保護を目的にCaribbean Cetacean Society(CCS)とこのIWCを設立したが、カリブ地域の統一されてないアータを推めたリ、鯨類の殺戮などの把握に努めている。CCSのスタッフは、カリブ地域での捕鯨は小型船が主で、し



外務省から見える、海外からのクルーズ船



42期 松田 彩

現在3年目。日本と中国の3か国がバランスの取れた関係を続け、平和な生活を守るために、為政者を志す。食料安全保障や難民防衛などの観点から、日本の一次産業を強化したいと見え、特に漁業振興を提案。海洋大国・日本を自許す。

1988年7月広島県生まれ、35歳。米国・オハイオ州立大国際関係学部卒、中国・北京大大学院哲学部中国哲学専攻。四年で1年留学した。2021年度松下政経塾入塾生。

獲らないが価値観共有

もなかった。一方で、米国をあらがって主に獲る国民が

多いが、米国が子供を産んだりしているため、関係性は感じられる。

A&Bの捕鯨事情だが、周囲の海が狭く、クジラやイルカも暮らしていないので、昔から獲っていない。それでも漁業における日本からの援助がある関係か



日本から無償提供された、アンティグア・フィッシャリーズ社の建物の前で記念撮影

かも小規模であり、たまたま見つけて獲れるなら獲るくらいだから、資源量にそこまでの影響はないだろうと語っていた。

Cでの獲のみという、そのような小国との関係は日本側の予算を使うのはいいかなものか」と質問されたことがある。このように、カリブ諸国が小国たという認識の人もいれば、地球どこにあるかすら分からない人もいるほど、確かに日本

人にとってなじみは薄い。しかし、水産関係の国際会議だけに限らず、例えば、日本の目標である国連安全保障理事会の常任理事国への道など、大切な「二重」

そして日本の漁業分野における地道な国際貢献が、世界の平和と安定につながることを証明していくべきだと感じた。

(おわり)

